

第5回聖籠町生涯活躍のまち構想研究会 議事要旨

日 時	平成 29 年 1 月 27 日（金） 13 時 30 分～15 時 55 分
場 所	聖籠町役場会議室
出席者	委 員：窪田昌行会長、天尾壮一郎委員、石塚純委員、鈴木典子委員、手嶋京子委員、樋口友貴委員、岩村正史委員、三品勝義委員、望月健三郎オブザーバー（代理） 聖籠町：近藤総務課長、高松総務課長補佐、松井町民課長補佐、保健福祉課（宮下係長）、牧野主任 日本総合研究所：渡辺康英、堀米剛（記）
資料	資料 1 住民シンポジウムアンケート調査結果 資料 2 住民向けアンケート調査票 資料 3 聖籠町版「生涯活躍のまち構想」に係る提案

1. 開会

2. 会長あいさつ

会長 2025 年問題、30 年問題という超高齢化社会を迎える中で、地域包括ケアシステムが立ち上がらなければ社会保障経済が破綻する状況である。一方で、中々地域包括ケアシステムのモデルとなる事例が生じていない。聖籠町はシステム構築に向けた条件が整っている地域である。聖籠町における生涯活躍のまち構想が町民にとってどんな価値を持つのか、それについて議論を深めたい。

3. 議事

（1）シンポジウム開催報告について

事務局 資料説明（資料 1）

事務局 全体的に、シンポジウムをとおして生涯活躍のまち構想の有益度が伝わり、これまでの負のイメージが覆すことができたという良い効果が得られたと感じている。

委員 シンポジウムに出席したが、講師の方が分かりやすく説明してくれた。特にシェア金沢の事例は良かったと思う。

委員 シンポジウムに出席した。アンケートの結果を見ると「有益である」、「捉え方が変化した」とのプラスの回答割合が多い。個人として聞いた結果、行政の支援を受けながら、住民も積極的に参加し、既存の資産を活用しながらタウン型の方向に持っていったほうが良いと考える。ただし、最初からは難しいので、まずはエリア型から着手し、タウン型に進むべきと考えている。

委員 シンポジウムには出席はできなかったが、非常に好意的に構想を受け止めてくれている感がある。開催の効果はあったと思う。ただし、アンケートの有益度は、商売に生かせるか、介護に役立てるかなど、人によって捉え方が異なる。そのあたりを聞けるようなアンケート

- トにすれば、もう少し細かに整理できたのではないか。次回に活かしてほしい。
- 委員 シンポジウムには出席できなかった。来ている方はある程度町に関係している人が多かったのではないか。ある程度行政の事情を知っていて、比較的理解のある人が集まっていたと思う。人数的にもサンプルとしては少ない。今後構想を進めていくには、あまり町に関わっていない人に対する理解を求めることが必要ではないか。アンケートだけをもって有益とは一概に言えないと考える。
- 会長 シンポジウムの後に、住民 1000 人へのアンケート調査も実施しているので、それも組み合わせ検証していきたい。
- 委員 確かにシンポジウムの出席者は役場の人間が多かった感がある。
- 会長 まずは役場の人間に理解してもらうことが重要。内閣府の構想やシェア金沢の取組事例など貴重な話があったので、個人的にはもっと聞きに来てくれる人がいても良かったと感じる。
- 委員 6割の人が構想を有益と捉えたのは良いことだが、この人数のみでは判断しづらい。住民アンケートの結果も見てみたい。
- 委員 前半一部のみ参加した。C R Cは全国 200 強の団体が取組んでいるとのことだが、他にもこのような住民向けシンポジウムは開催されているのか。開催されているのであれば、他の市町村のアンケート結果も見てみたい。
- 会長 他の団体の対応状況について、内閣府に概要だけでも聞ければ良い。
- 委員 シンポジウムには参加できなかった。シニア層は将来の自身の生活設計を考えていることから、シンポジウムの内容にかなり共鳴を受けた人も多かったのではないか。アンケートサンプルの人数としては少ないかもしれないが、この世代が持つ共通の課題に対し、シンポジウムで一定の方向性を示すことができたのではないか。
- 会長 首都圏や新潟県のアンケート結果を踏まえると、やはりシニア層の将来設計のあり方が切実な問題になっていると感じる。
- 委員 聖籠町に住んで間もない人にとって、「町がこういうことをやっている」というPRになったのではないか。

(2) 住民向けアンケートについて

- 事務局 資料説明 (資料2)
- 事務局 住民向けアンケートについては、1年以上町に住んでいる 20 歳以上の住民を無作為に抽出し、年始よりアンケートを実施中。今の段階で 36%の回収率である。集計結果は次回の委員会にて報告する予定である。ざっと回答を見たところ、各年代からバランスよく回収できている様子である。また、生涯活躍のまち構想については「知らない」との回答が多い気がする。生涯活躍のまちに期待すること、懸念していることを問いかけ、最後に「聖籠町が構想に取組むべきかどうか」という質問構成としている。これまでの調査票を見ると、「どちらかというを取組むべき／取組まないべき」の回答比率が概ね半々の様子。また、「分からない」という回答が大半を占める感がある。
- 委員 このアンケートを見た人にとって、1枚分の説明のみでは、生涯活躍のまち構想の理解が難しいのではないか。

- 委員 このアンケートで構想に対する結論を出すような構成になっているが、少し判断が難しいのではないかと。ただし、受入側の姿勢として、生涯活躍のまち構想を受け容れるのか、外部からの人を受け容れるのか、あるいは自分たちだけでやっていくのか、このような判断はアンケートの結果から少し見えてくるのではないかと。
- 委員 生涯活躍のまち構想のコンセプトに掲げられる、2番（多世代共生）と3番（交流機能の導入）は生涯活躍のまち構想に限った話ではないのではないかと。結局は、1番の地域包括ケアの話に収斂するものと捉えている。ただし、社会福祉という話に限定するのではなく、元気なうちはしっかり仕事ができるが、リタイアしたときに元気に住める、という雇用の議論が本筋と考える。
- 会長 内閣府も地域包括ケアシステムが機能しなければ日本が成り立たないという捉え方をしている。そういう意味では2025年までは待たない状況である。本日のように、喧々諤々の議論を進めていかなければいけない。
- 委員 「社会福祉が破綻するから地域包括ケアに寄せる」という行政の考えがあると思うが、一方で住民は将来が不安で消費活動をしない状況である。生涯活躍のまち構想で財政が悪化するという懸念も持っている。それを踏まえると、やはり雇用という概念が重要で、それをセットで住民に見せる必要があるのではないかと。
- 委員 地域包括ケアを重視していくのであれば、まず町民の中にそのシステムをしっかり定着させる必要がある。そのような意図であれば、アンケートの内容も変わるのではないかと。このアンケートではそれが理解しづらい。社会保障の財政面から、多くの方に来てもらわなければいけないということであれば、それを理解させるための説明をする、という方向性に則ったアンケートに仕立てなければいけない。
- 委員 基本的な部分で住民が構想を理解できていない。「なぜ町がこのような取り組みをしているのか」という理解を浸透させた上でアンケートを行えば良かったと感じる。今更だが、冒頭にそのような説明があっても良かったのではないかと考える。
- 委員 結果論になるが、結論付けるような質問となっているので、それは少し早すぎた感がある。もう少し広げて意見を募ったほうが良かったかもしれない。
- 会長 他の委員の言うとおりに、一つのプロセスとして、アンケートの結果を受け止めていきたい。生涯活躍のまち構想は国が予算をつけて進めている施策である。アメリカ発だが、日本版CCRCと変遷し、現在はまちづくりの色も帯びてきている。
- 委員 住民にとってこのアンケートへの回答は難しいと感じるが、一方で、これ以上の情報を載せるとあまりに情報が多くなる。アンケートの結果は一つのプロセスとして捉えるべきである。
- 会長 シンポジウムでの発表など、生涯活躍のまち構想を広く住民に発信していくことが今後の行政と民間の役割と考える。

（3）聖籠町版生涯活躍のまちの方向性検討について

事務局 資料説明（資料3）

- 委員 今までの議論から飛躍し、かなり要素が具体化されている印象を受ける。構想の一つの核的な装置として具体的な施設・領域を作り、対流・交流を進めることで、聖籠町としての

将来像へ繋げるという意図だと思うが、やや具体的すぎる感がある。他の事例を見ると、CCRCは将来設計のための一つのシステム・コミュニティであり、お金を払ってそこに入り込むという形があるが、聖籠町もそのシステムを作るということなのか。シェア金沢やオークフィールド八幡平のような施設がそのまま聖籠町に運び込まれるイメージを受けるがその場合、住民アンケートに掲げるような若い人との交流をどう進めるのか、この提案ではイメージが沸きづらい。

事務局 国の方は、可能な限り要素を具体化した議論を行うことで、生涯活躍のまち構想を普及させるという考えでガイドラインを整備している。本提案もそのガイドラインを参照し、議論のたたき台とするべく、具体的なイメージを提示している。

委員 聖籠町は立地や行政サービスがうまく機能して人口が増えている良い状態にある。提案のように民間が施設を作って人を招き入れるという話だと、よっぽど付加価値の高い施設を作らなければいけない。

会長 首都圏などの外部からだけではなく、町内や県内の近隣からの住み替えというケースも想定している。また、内閣府も生涯活躍のまち構想についてそのような考えを持っている。

委員 これまでの分譲地の販売状況を見ると、買い手は町内と町外が半々くらいである。最近では住居も飽和状態で空き家も出始めている。やはり施設の付加価値を出すことが重要である。

委員 人口減少社会で地方が消滅してしまうという背景もあり、町やコミュニティを維持するシステムとしてCCRCがあると捉えている。また、このシステムは、リタイア世代に限らず、現役だが将来に少し不安を持つシニア世代、また、子育て世代等の若い世代から構成される。若い人にとっては地域包括ケアシステムではなく、やはり雇用環境を重視する。このような層を吸収するようなコミュニティのあり方としてCCRCを捉えなければいけない。今の提案では、開発行為としてニュータウンを作るイメージを受けるが、CCRCを形成するのであれば、そこまでせずに公共施設や空き家といった遊休施設を活用するという考え方も良いのではないか。郊外のニュータウンは空き家化、高齢化が進んでおり、個人的にニュータウンを作る時代ではないと考える。高齢者はまちなかに住みたがるという傾向も加味し、エリアを慎重に選ぶべきである。このような施設を作った場合に採算が合うのか、現状ハードルが高いと感じる。例えば、南魚沼市でも企業の撤退も相次ぎ、空き家の居住保証制度の件で問題が生じていると聞いている。

委員 この提案は具体化されすぎていて、これまでの議論がどう活かされているのか見えづらい。一方で、このような具体例がたたき台として無ければ議論が進まない。この提案に示される要素一つ一つについて、どれが聖籠町に合っているか検証していくべきと考える。そのような作業をとおして、コミュニティのあり方を検討していきたい。

委員 提案より、生涯活躍のまち構想を実現すると決まった場合に考えなければいけない要素が見えてきた。

委員 聖籠町のことを踏まえた提案とは思いますが、総花的な感じも受ける。これまでの事例の良いところ取りのようなイメージだが、これから聖籠町の実態に当てはめて検証していく作業が必要である。新しい町を作るにしても、その核となる場がないといけない。聖籠町にはいわゆる「銀座」がない。他所にはない、聖籠ならではの場のあり方を考えていくべきである。

- 会長 聖籠町では近年総合病院が開設され、そこを核としたまちづくりも考えられる。一方で、そもそも国は、在宅医療を中心とした地域包括ケアシステムを軸に生涯活躍のまち構想を捉えている。厚生労働省も地域でコミュニティを設けて生涯活躍の場を整備していこうというスタンスである。
- 会長 生涯活躍のまち構想の入居者のあり方について意見があればお願いしたい。
- 委員 経験上、ハードを先に整備してコンセプトを後付けにすると大概失敗する。まずはコンセプトをしっかりと議論して、構想を固めていくべきである。入居費用が特養に比べて高くなってしまふ。雇用の場の創出など、入居者が収入を得られる仕組みが考えられれば興味深い。
- 委員 シニア層が「今後 30 年安心して住むためにはどういう準備をすればよいのか」と考えるように、CCRCは一つの人生設計である。CCRCにただ入るだけではつまらない、誰かと交流したいという考えがあり、そのためにはしかなるべき環境が必要と捉えている。
- 会長 アメリカは日本のような皆保険制度ではなく、CCRCへの入居も自己責任の考え方に基づいている。例えば、公的年金 1/3、私的年金 1/3、自己資金 1/3 というイメージで個々人が入居費用を捻出している。
- 委員 生涯活躍のまちにとっての理想的な入居者は子育て世代と考える。また、学生に関しては、豊栄には医療福祉大学があるものの、大学近辺のアパートは空いており、駅近辺のアパートが埋まっている。若い人にとっては駅に近いことが住居選択の大きな要素になっている。
- 委員 いきなりハードを講じるのではなく、ソフト面の設計が大事ではないか。考えの順序として、まずはソフト面を充実させて人を集め、それを受け容れるためのハードを作る、というのが理想的ではないか。そのためのプロセスをスケジュール化すべきと考える。
- 委員 学生は毎年入れ替わることもあり、「地域が活性化している」というイメージを発信できる。また、シニアや子育て世代が安心して就職活動ができるというのはやはり大きな要素である。地域包括ケアシステムに関して、聖籠町には既に多くの事業者がいる気がするが、高齢者にとって 24 時間の医療体制が整備されなければ安心できない。新潟聖籠病院が核となって地域医療に取り組んでほしい。
- 委員 今後、若い人が減って高齢者が増えるという展望があるが、就労意欲のある高齢者が移り住む場合、何を求めて移るのかをしっかりと考えなければその後が続かない。具体的な意見は住民アンケートなどを介して一つ一つ把握していくべきである。
- 委員 シニア層が移り住む際に一番重要視するのは、「自分が体力的に安心して住めるか」、「医療関係が充実しているか」という点ではないか。さらに、「元気なうちに住民と交流関係が築けるか」ということも大きな判断基準である。
- 会長 CCRCの定義として、「自立型の住まいから介護型の住まいに移る権利がある」ということも示されており、「コミュニティの中で最後まで住まう」という考え方が根底にある。継続的なシステムというのがCCRCの利点である。日本のCCRCには、まだこの自立型の住まいという概念が希薄である。
- 会長 議論の取り纏めとして、一言伺いたい。

- 委員 本日の提案のように具体的なイメージがあると議論の題材となる。行政側にも尽力も期待したい。
- 委員 これまでの高齢者福祉事業で失敗したと感ずるのは、生活支援や楽しみといった観点である。聖籠町の構想でその点を重点的に検討していきたい。
- 委員 今後も具体例をもとに、聖籠町ならではのソフト面の取り組みを考えていきたい。
- 委員 若いファミリー層の転入促進について、政策的には聖籠町は今も十分に頑張っている。この政策はいつまで続くのか懸念しているとともに、これ以上の上乗せの政策は難しいとも感ずている。若い人が来るとさらに上乗せの政策が必要となってしまう。
- 委員 近隣の市町村から言われるのは、「聖籠町は保健面の対応が良い」ということである。これは大きな強みであり、「病気になるように行政がケアをしてくれる」というシステムをさらに充実させること、対外的にPRすることが聖籠町ならではの強みとなる。
- 委員 どの自治体も社会減を止めるべく施策を打っており、都市間競争が起きている状況である。差別化できる要素が必要であるが、それは財政的支援ではないと思う。もう一度町の強みを分析し、その中で就労機会を確保していくことが重要である。今は東港の企業により雇用環境が確保されているが、長いスパンでどうあるべきか考えるべきである。
- 委員 住民アンケートの結果がどう出てくるのか興味深い。
- 委員 南魚沼市では全国に公募を掛けて地域課題に向けたテーマを定めたが、ほとんどが大手企業からの提案であった。聖籠町でも一過性ではなく、10年先まで継続するようなアイデアを全国から募るのも一案ではないか。
- 会長 本日の議論の中で、共通的に「聖籠町の独自性が何なのか」という意見が出た。SWOT分析をするなど、事務局にその内容を整理してほしい。

(4) その他(事務連絡等)

- 事務局 本日の議論を受け、「聖籠町のベースが何か、強みが何か」を整理し、聖籠町に適した生涯活躍のまちを考えていきたい。アンケートの集計結果も早めに委員に展開する予定である。次回研究会は2月23日(木)に設定している。開催案内は別途連絡する。3月の研究会は最終回となり、議論の場というより、町長への報告の場として位置づけている。

以上